株式会社オリエンタルコンサルタンツ
ORICONSUL

情熱とやりがい

第17号
2026
Autumn



OC最前線

社会価値を創るプロジェクトの最前線

課題解決を超えた、次なる挑戦へ

情熱座談会

技術士は、建コン技術者のパスポート

～仕事で価値を発揮するプロフェッショナルのリアル～

チャレンジャー

はたらく社員の笑顔

成長のキセキ

Column

OC最前線

社会価値を創るプロジェクトの最前線

課題解決を超えた、次な る挑戦へ

社会課題が複雑化する現代で求められるのは、既存の枠組みにとらわれず、自ら課題を見出し、解決策を生み出すこと。
その実現には、視野を広げてこれまでにない手法を柔軟に取り入れ、挑み続ける姿勢が欠かせません。
私たちは、分野を横断した「総合事業」、企画から施工や維持管理までを一貫する「垂直事業」、
そして自社で投資し、社会インフラを運営する「事業経営」などを進めてきました。
本特集では、現場に変革をもたらした4つのプロジェクトを通じて、「社会価値創造企業」の真価を探ります。



Contents

01 OC最前線
社会価値を創るプロジェクトの最前線
課題解決を超えた、次なる挑戦へ

09 チャレンジャー
- 橋梁設計の知見をもとに、羽田空港の新たな可能性を拓く
- グループ各社と連携し、新たな上下水道のあり方を模索
- 地域特性を生かした、独自の脱炭素モデルを構築
- 個々の課題に寄り添い、建設企業を新たな活躍の場へつなぐ

13 情熱座談会
技術士は、建コン技術者のパスポート
～仕事で価値を発揮するプロフェッショナルのリアル～

17 はたらく社員の笑顔

19 成長のキセキ
- 遊びと防災を両立 公共空間の新たな価値を追求
- 新入社員研修の場を最大限に活用、講義内容を超えた成果を得る
- Copilotを駆使したシステム構築で劇的な業務改善を実現
- 組織課題への取組みが評価されMotivation Team Award2026に入選

21 Column
OC社員、会社の出来事を語る！
- シンガポール現地レポート
- 公式SNS（Instagram、X）について
- クラブ活動で得た気づき（関東支社フットサル部）
- 広がるSmile-3S活動
- 田中賞受賞しました。やったぜ！
- 河川清掃（CSR）活動の運営を通じて感じたこと

「道の駅を制覇したプロたちが選ぶ2026年版道の駅大賞」
2年連続全国総合部門第1位受賞
（発行元：宝島社／田舎暮らしの本）

総合事業によるエリアマネジメント

群馬県前橋市

地域経営推進

豊かな観光資源を有する群馬県前橋市において地域活性化を加速させるため、OCでは2012年より指定管理事業に取り組んでいます。以来、敷島公園や道の駅まえばし赤城、前橋中央児童遊園「るなばあく」など、多くの公園や施設の管理を担ってきました。単なる施設の維持にとどまらず、特性を生かしたイベントの企画・運営や、カフェの開設などをとおして、地域の賑わい創出と、公園を起点とした持続可能なまちづくりを目指しています。



道の駅まえばし赤城の運営管理業務

道の駅で地域の魅力づくりの最前線に立つ

2023年にオープンした「道の駅まえばし赤城」。当社は、前橋市の建設会社である㈱ヤマトとともに、本施設における基本計画の策定から設計・建築、運営管理まで一貫して携わっています。オープンにあたり、㈱ヤマトの特定子会社、「㈱ロードステーション前橋上武」に当社から4名の社員が出向し、施設の維持管理やイベントの企画、農畜産物直売所の運営、さらには出張販売まで、幅広い現場業務を担いました。赤城山のそばに位置する本施設は、「前橋の新たな玄関口」をコンセプトに、地元農家が生産する新鮮な野菜や果物、地域の特産品である豚肉などを扱っています。さらに、温浴施設やバーベキューエリアのほか、トランポリン型遊具を備えた芝生広場も併設。買い物や飲食はもちろん、くつろぎやアクティビティも楽しめる地域住民の憩いの場でありながら、県内外からも多くの観光客が訪れる前橋市の観光拠点となっています。



道の駅まえばし赤城の全景

生産者とともに、信頼される売場づくりを

地元農家約300人で構成される「生産者の会」の運営にOCの社員が携わり、施設内の「農畜産物直売所」における農畜産物の販売価格や販売基準、マルシェといったイベントなどについて、生産者と丁寧に合意形成を図っています。また、魅力的な売り場づくりにも従事。時季に合わせて、旬の食材をアピールできる配置へと工夫したり、売れ行きの偏りをなくすために陳列場所を調整したりと、生産者やパート従業員と密に意見交換をしながら売り場を整備しています。さらに果物の販売では、品質の高い商品を適正な価格で提供するための試みとして、販売前にスタッフが試食するルールを導入。OCの社員も販売員として試食し、お客様へ自信を持って味や特徴をお伝えすることで、「ここで販売されている商品なら安心」という信頼の醸成につなげました。こうした取組みが、農畜産物の価値をお客様に正しく理解いただき、それが生産者に還元される好循環をつくっています。



道の駅まえばし赤城にて約10名の生産者と協力したいちごマルシェの様子



前橋公園を起点とした地域活性化への貢献

公園を拠点に地域と連携し、新たな賑わいを創出

2025年からは、OCが10年以上取り組んできた前橋中央児童遊園「るなばあく」の管理業務を拡大し、東京ドーム約4個分の広さを誇る「前橋公園」の管理・運営も担っています。今年1月には、隣接する前橋東照宮と連携した初詣イベントを開催。ミニゲームの提供や、るなばあく内の立体迷路の無料券を配布しました。一方で前橋公園では、入園無料ゆえに管理費が先行し、赤字化しやすいという課題も抱えています。そこで、「桜まつり2026」では屋台やキッチンカーを誘致し、収益化への足がかりを築きました。また、駐車場の有料化により、収益の確保だけでなく混雑の緩和にもつなげました。ほかにも、ビアガーデンの営業や民間企業との協働によるカヌー体験、るなばあくの夜間解放といった、行政による管理にはなかった手法で地域の魅力を発信しています。今後も、近隣の施設や地域の事業者とのシナジーを生かした地域活性化への貢献が期待されています。


前橋公園にて隣接する前橋東照宮と初めて協働した初詣イベントの様子

担当者コメント

当社と地域の多様なスキルを結集し、
地域に必要とされる拠点を目指す

公共施設の運営には、維持費や管理費などのコストが発生します。だからこそ、単に支出を抑えるだけでなく、必要な部分には投資し、新たな収益を生み出す視点が重要です。実際に前橋では、施設内で利用者を待つだけでなく、集荷や出張販売など地域外へも出向き、新たな収益機会の創出にも取り組んできました。こうした取組みには、当社と地域の多様なスキルや役割を結びつけ、協働していくことが欠かせません。今後、新たな地域拠点の構築に携わる際にも、前橋で培った、コストと投資を見極めながら収益機会を自らつくる視点を生かし、地域・行政・利用者・事業者、そして当社に利益が循環する「五方よし」の事業を立ち上げ、持続可能な運営と地域への還元を実現していきたいです。



添田 信行
関東支社
地域活性化推進部 副主幹
早稲田大学大学院／
政策研究大学院大学了

2010年に入社。2023年に環境部から地域活性化推進部に異動したのち、現場スタッフとして道の駅まえばし赤城の立ち上げに参画。現在は前橋公園の運営業務や地域活性化事業のコンサル業務をとおし、新たな地域拠点づくりに携わる。

「令和3年度優良工事等事務所長表彰」受賞
（表彰元：国土交通省 関東地方整備局）

新たな日本の顔となる交通結節点

品川プロジェクト

交通運輸 × 地方創生

2017年に開始した、品川駅西口の交通結節点建設プロジェクトでは、国道上空に人工地盤を整備し、次世代モビリティの発着拠点となる新たな集約型公共ターミナルの実現を目指しています。さらに、初めて東京を訪れる人々に感動を与える「新しい日本の顔」として、情報発信の場や防災拠点としての機能も備えます。OCでは、国土交通省から業務を受託し、多角的な視点からターミナルの実現に向けた検討に取り組んでいます。



計画当初のイメージ

交通や防災の拠点として、未来志向のターミナル構築を目指す

国道15号の上空に新たな駅前空間を創出

品川駅西口駅前広場では、未来の都市のあり方を変える先進的なまちづくりへの挑戦として、国道15号上空に人口地盤を整備し、新たな交通結節点を創出するプロジェクトを2017年より開始しました。本プロジェクトは、鉄道・バス・タクシーなどの公共交通機関を一体的に結ぶ総合公共交通ターミナルを、官民連携で整備する「バスタプロジェクト」の一つとして実施されています。直轄国道と駅が近接する立地を生かし、次世代モビリティの発着にも対応するエリアを整備することで、歩行者が快適に過ごせる空間を実現するほか、災害時には避難情報の発信や周辺の避難所への誘導を担う、防災拠点としても機能します。OCは、国土交通省から業務を受託し、2017~2018年度は事業化に向けたフィージビリスタディ※や事業計画の策定を、2020年度以降はモビリティの検討や広場内の建築物の設計、さらには関連法制度への適合性の確認などを行っています。



デッキ上のモビリティイメージ

※フィージビリスタディ：新たな事業を始める前に、その実現可能性を多角的に調査すること。

「バスタ新宿」に始まった、新たなターミナル運営の形

このプロジェクトのモデルケースとして挙げられるのが、2016年に開業した「バスタ新宿」です。法律上は「道路」とされるバスタ新宿では、「道路占用」により施設内に店舗を設置しています。その売上の一部を道路の維持管理費に充てる仕組みにより、従来は認められていなかった道路上での物品販売といった営利活動を可能にしたのです。こうした制度を道路法に位置付けたことが、「バスタプロジェクト」の始まりとなっています。さらに、2020年の道路法改正では、「特定車両停留施設」が新たに制度化されました。これにより、道路区域内に整備されたターミナルを、民間事業者がPFIのコンセッション方式により運用できるようになったほか、車両の発着時に施設利用料を徴収し、その収益を施設の運営費に充てることが可能となりました。こうした持続可能な管理運営の仕組みが制度的な基盤として整えられたことを受け、品川でのプロジェクトが発足しました。



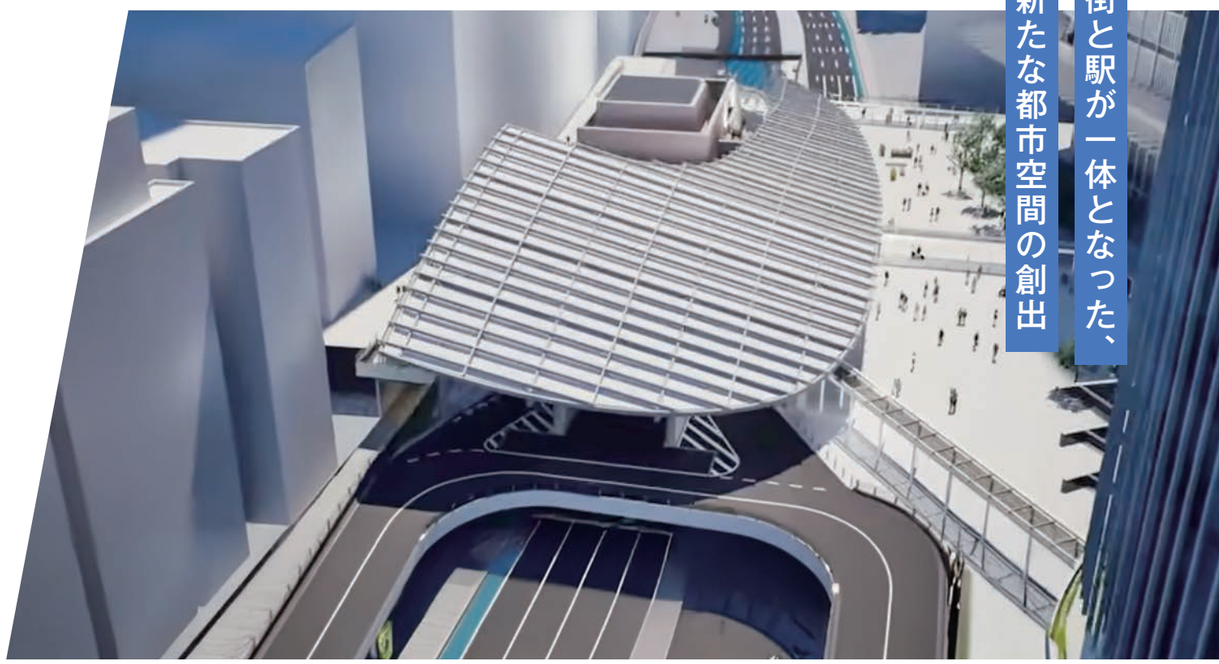
デッキ上の大屋根空間

リニア開業を見据え、品川駅を新たな日本の玄関口へ

現在は「モビリティをどのように運用するか」「駅前広場をどのような空間にするか」「誰が管理・運営を担うか」という3つの視点を中心に議論が重ねられています。OCは、目指す空間のあり方について、関係者との合意形成や社会的な認知の拡大を進めながら、事業の実現可能性を検討するほか、建築家の乾久美子氏とともに空間デザインの検討にも携わり、道路という法的制約が大きい環境で、機能や構造、デザインといった多角的な面から実現に向けた調整を続けています。過去には、用地取得に向けた地権者との協議に用いる説明資料の作成や、用地取得が難航した場合を想定した法制度の整理なども行いました。「新しい日本の顔となり、国内外からの来訪者を迎える」というコンセプトのもと進められている本プロジェクト。将来的にはリニア中央新幹線の開業も予定されている品川駅で、初めて東京を訪れる人々に感動を与える駅前空間の実現を目指しています。



デッキ上でのさまざまな活動イメージ



街と駅が一体となった、新たな都市空間の創出

担当者コメント

バスタプロジェクトの先駆者として、貴重な経験を蓄積する機会に

道路上空のデッキに建築物を建てるという計画には前例がありませんが、当初から掲げる「未来志向のターミナル」という理念を実現するため、関係者と議論を重ねながら、最適な方向性を模索しているところです。バスタプロジェクトの貴重な先行事例として、本事業で得た知見を当社が携わる同様の事業においても展開し、円滑かつ主導的な推進に寄与しています。そして、国交省とともに街のあり方を変える大きなプロジェクトに携わった経験は、今後新たな課題や未知の業務に挑戦する際の自信になると考えています。



中村 実

関東支社
都市政策・デザイン部 副部長 兼
関西支社 総合計画部 技師長
九州大学大学院了／
東京大学大学院了

1998年に入社後、関西支社で交通系の業務に従事。2007年に関東支社へ転勤し、渋谷駅での基盤整備のプロジェクトに参画。そのほか、交通結節点やスマートIC、道の駅といった交通拠点の開発に幅広く携わる。

※写真は、「国道15号品川駅西口駅前広場デザインコンセプト（動画）」（OC作成）からのキャプチャ画像です。

「第7回インフラメンテナンス大賞」優秀賞受賞
（表彰元：国土交通省）

道路インフラ包括維持管理

奈良県田原本町

道路整備・保全

奈良県田原本町では、橋梁の老朽化に伴う修繕工事が急務となる一方、長期間にわたる工事や技術者不足への対応が課題となっていました。そこでOCは、発注者、設計者、施工者の三者が連携し、情報伝達を最適化する仕組みを整備。さらに、道路標識や舗装といった道路ストックの包括的な維持管理も引き受け、一貫した思想に基づく効率的な道路インフラのマネジメントを実現しました。



橋梁の修繕工事への対応から
道路ストックの管理までを一体化

独自方式で道路インフラを効率的にマネジメント

田原本町では、早期の修繕が必要とされる「健全度Ⅲ」の橋梁が39橋確認されていましたが、修繕工事が年に1～2件ほどしか進められない状況でした。そこでOCは、独自のECI方式（基礎自治体仕様）を提案。従来は発注者から設計者・施工者へ個別の意思伝達が必要なところを、三者が連携し、設計意図や留意点をより効率的かつ正確に伝達する仕組みを構築したのです。加えて、舗装や標識などの道路ストックも一体的に管理することで地域インフラを効率的にマネジメントできる体制を整えました。こうしたスキームにより、DX技術をはじめとする新技術の導入についても主体的な提案が可能となり、発注者の負担軽減と道路資産の安全性の確保が両立できるようになります。今後、この一気通貫の事業モデルによる、各自治体のニーズに応じたインフラマネジメントへの発展が期待されています。この取組みは、国交省の「地域インフラ群再生戦略マネジメント」の先行事例としても紹介されています。



地元施工者向けの技術研修会（本業務で作成した「設計・施工事例集、施工の手引き」を用い座学と現場実演を実施）



現場臨場による施工者支援（三者協議会により現地状況と設計図面の相違への対応方針の早期決定）



担当者コメント

人に寄り添うコミュニケーションの大切さを実感

建設コンサルタントとして、プロジェクトを円滑に進めるために、発注者や施工者とのコミュニケーションを大切にしています。特に、地元の工事会社には年配の方が多かったため、パソコン作業といった業務に必要なデジタル化への対応を丁寧にサポートしました。次第に業務以外の相談も受けるようになり、「大永さんに聞けば力になってくれると思って」と言っていただけたことも。相手の立場に寄り添った誠実な対応が、信頼関係の構築につながるのだと実感しました。

大永 夕陽
関西支社 構造部
技術主査
鳥取大学卒

2020年に入社。関西支社構造部にて橋梁等の構造物の維持管理業務に従事する。現在はアセットマネジメント業務に携わる。



河道の変化をAIで可視化
適切な治水対策につなげる

「2023年度インフラメンテナンス チャレンジ賞」受賞
（表彰元：土木学会インフラメンテナンス総合委員会）

「令和5年度優良工事等事務所長表彰」受賞
（表彰元：国土交通省 中部地方整備局）

衛星データ活用研究開発

DXを活用した河川管理

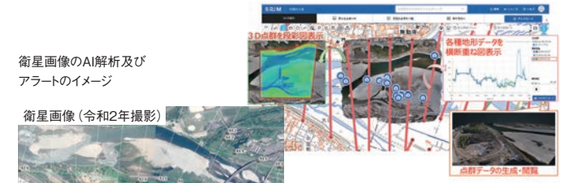
流域管理・保全

河川を安全に保つためには、河道の状態変化に応じた対策が欠かせません。また、気候変動に伴い豪雨災害が激甚化する昨今、洪水を安全に流下させる適切な河道管理の重要性は増す一方です。こうした課題に対し、OCは河川管理者向けのクラウドサービス「SRiM」を開発。AIを用いた高精度な画像解析により、河道の状態変化を定量的かつ詳細に分析し、迅速で効率的な対策判断につなげています。

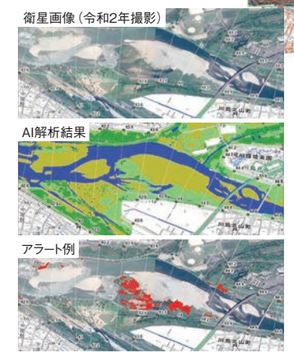
河道管理の支援サービス「SRiM」を開発

河道の管理では、流下能力の低下につながる変化を早期に捉え、適切な対策を講じることが重要です。しかし従来の河道評価は、5年に1度の調査の結果に基づいて手作業で実施され、その間に生じる変化は反映されていませんでした。また、状態の把握から対策までに複数年を要するため、対象となる事象が消失してしまうケースも。そこで、OCが㈱スカイマティクスと共同開発したのが「SRiM」というクラウドサービスです。河道の衛星画像やドローンによる撮影画像をAIで解析し、注意が必要な箇所をアラート通知する本システムは、対策の必要性を判断する情報や機能を一体化して提供でき、河川管理者の迅速かつ効率的な判断を支援します。このシステムを木曽川上流河川事務所で試行した結果が、河川管理者の予防保全に貢献したとして「2023年度インフラメンテナンス チャレンジ賞」を受賞しています。

衛星画像のAI解析及びアラートのイメージ



「SRiM」による各種データの統合的な活用イメージ



担当者コメント

一人では成しえなかったサービス構築

このプロジェクトでは、AIに学習させるデータ作成や、AI解析結果を活用したアラート抽出などの大量のデータ処理が必要でした。できる限り作業意図はメンバーに伝えるよう心がけましたが、上手くいくか見通せないものも多かったです。しかし、メンバーそれぞれが目的・役割を理解し、少しでも効率的な処理方法などを検討してくれたおかげで、無事にシステムを構築し、高い評価をいただけました。尽力してくれたメンバーたちに深く感謝しています。

吉田 勢
関東支社
河川砂防・港湾部 兼
DX推進本部 主監
武蔵工業大学大学院（現 東京都市大学）了



2004年に入社。2009年から「河川環境管理財団（現 河川財団）」に出向し、2011年に復帰。以降は関東支社の河川砂防・港湾部に所属し、河川の航空画像を解析するためのAIの開発や、「SRiM」の構築に従事する。

道路整備・保全

橋梁設計の知見をもとに、羽田空港の新たな可能性を拓く

羽田空港において、2つのターミナルをつなぐ人工地盤の整備が計画されています。そんな一大プロジェクトに、設計技術者として携わる内藤さんに、前例のない大規模な取組みに向き合う姿勢について語っていただきました。



内藤 靖
関東支社 構造部 次長
九州工業大学大学院了

2006年の入社以来、構造部にて主に橋梁の計画や設計に従事する。2018年から2019年は統括本部にて広報や新卒採用にも携わっていた。羽田空港における人工地盤検討業務にはプロポーザル提案の段階から関わり、管理技術者として業務全体の統括管理を担当した。

羽田空港では、第1ターミナルと第2ターミナルを結ぶ人工地盤を整備する計画が進められている。現在、両ターミナルをつなぐ動線は地下通路に限られているが、地上での接続が実現すれば、駐機場の拡張が可能になるだけでなく、利用客が保安検査場を出ることなくスムーズに乗り継ぎができるようになり、空港全体の利便性が飛躍的に向上する。そんな、国内でも類を見ない大規模なプロジェクトの検討業務に、内藤は設計技術者として携わった。

「通常の橋梁設計業務では、車両重量を約25トンと想定するのに対し、今回のプロジェクトでは約300トンの飛行機を支えられる構造を考える必要があります。求められるスケールがこれまでと大きく異なるため、感覚をつかむことの難しさを感じています。しかし、設計の根幹となる計算方法は変わりません。橋梁設計の知見が豊富な先輩方の知恵も借りながら、過去の案件で得た知識を総動員して、検討にあたりました」

そんな内藤が一貫して大切にするのが、「疑問を持つ姿勢」である。



現場で設計に関する情報を関係者に共有している様子。相手に寄り添ったコミュニケーションを取ることも、技術者として重要なスキルだと考える。

「構造物の設計では、設計基準への正しい理解が欠かせません。ソフトやAIを使えば短時間で答えを出せますが、『なぜその結果になるのか』を自分の頭で考えることが重要です。部下に対しても、自分が触れたデータに疑問を持つよう伝えています」

すぐ答えにたどり着く問いよりも、試行錯誤を重ねながら課題に向き合うプロセスに、仕事の面白さを感じるという。今回の検討業務に向けたプロポーザルへの応募も、未知の領域に挑戦したいという探究心が原動力となった。

内藤がもう一つ意識しているのが、「顧客に対する誠実さ」だ。

「我々の仕事はサービス業だと考えています。今回のように前例の少ないプロジェクトでは、課題や解決策を正しく共有することが特に重要です。提案内容を少しでもわかりやすく伝えられるよう、日々の連絡や資料作成にも細部まで気を配っています」

こうした技術力へのこだわりと、顧客に寄り添う姿勢が評価され、内藤は2026年7月、国土交通省より〝優良業務・優秀技術者局長表彰〟を受賞した。

「業務への向き合い方が評価され、大きな励みになりました。経験を重ねても、常に新鮮な気持ちを忘れずにいたいです」

技術者として、日本の玄関口となる羽田空港の機能向上に携われることに、誇りを感じているという内藤。橋梁設計で培った技術に磨きをかけながら、今後も新たな構造物の設計に向けて挑戦を続けていく。

流域管理・保全

グループ各社と連携し、新たな上下水道のあり方を模索

相次ぐ自然災害や設備の老朽化などにより、上下水道インフラの再構築が急がれる中、民間の創意工夫を取り入れた「水の官民連携」の検討が、全国で始まっています。埼玉県春日部市で、その導入に向けた調査業務に携わる黒岡さんにお話を伺いました。



黒岡 あゆ子
関東支社 河川砂防・港湾部 技師
山梨大学大学院了

2023年に入社。河川砂防・港湾部にて、下水道の計画業務や雨水管理総合計画の策定に従事する。春日部市における「ウォーターPPP導入可能性調査業務」では、プロポーザル資料の作成段階から携わり、現在は主担当としてプロジェクト全体を取りまとめる。

2026年4月、OCは埼玉県春日部市における「ウォーターPPP※」の導入可能性調査業務を受託した。上下水道を官民連携によって一元的に管理するための計画を策定するプロジェクトで、グループ会社2社との共同企業体（JV）で進められている。上水道を㈱中央設計技術研究所、下水道を㈱ジェーエステックがそれぞれ検討し、OCはそれらの統括を担う。

春日部市では、2023年に上下水道事業が統合されたものの、それを踏まえた新たな業務運営の仕組みは十分に確立されていない。ウォーターPPPが実現すれば、民間企業による新技術の導入やDXの推進をとおして、市の職員にかかる水道の維持管理の負担が軽減される。しかし、新たな事業スキームを構築するための合意形成は、一筋縄ではいかない。

「普段は下水道の計画業務を中心に携わっており、上水道の検討は初めてでした。人々の健康に直結する上水道には、下水道にはない仕組みや制度があるため、それらを整理するのに苦戦しました。また、これまでは定量的なデータをもとに検討する業務に多く関わってきましたが、今回は自治体職員の意見といった定性的な情報も勘案する必要があります。官民連携では、より幅広い視点が求められるのだと実感しました」

JVでのプロジェクトも、黒岡にとって初めての経験だ。自治体や地元企業など、多くのステークホルダーが参画する官民連携事業だからこそ、協力関係となる2社との円滑なコミュニケーションが欠かせない。

「JV先の2社それぞれに、課題整理のための報告書の作成をお願いする中で、成果物に求める方向性や内容を共有する難しさを痛感しました。そこで、認識のずれを防ぐため、こまめに打合せの場を設けながら、必要な情報を網羅した資料を作れるよう働きかけています」

黒岡にとって初めての取組みが連続する、今回のプロジェクト。だからこそ、初心を思い出しながら業務に臨んでいる。

「入社1年目に苦戦していた仕事が2年目にはできるようになり、その経験を3年目、4年目の業務で生かしてきました。今回のプロジェクトでも、そうした目の前の業務に一つずつ向き合いながら成長する姿勢を大切にしています」

水道インフラの未来を支える新たな仕組みづくりに大きなやりがいを感じるとともに、官民連携やJVといった、幅広い関係者とのプロジェクトへの意欲を一層高めていると、黒岡は語った。



企業向け説明会の様子

※PPP：行政サービスを行政と民間で連携して行うこと。

地方創生

地域特性を生かした、独自の脱炭素モデルを構築

茨城県笠間市は、脱炭素社会の実現に向けた独自性のある地域資源の循環を提案し、環境省が指定する「脱炭素先行地域」に選ばれています。共同提案者として申請に携わった谷さんに、認定までの歩みと意義について伺いました。



谷 有美子
関東支社 都市政策・デザイン部 技師
宇都宮大学卒

2019年に入社後、都市政策・デザイン部にて、主に自治体の再生可能エネルギー設備の導入にかかる調査や計画、設計に従事。また、環境省による実証事業等にも携わる。現在は、木質バイオマス活用や小水力発電事業の開発に取り組んでいる。

環境省が、2050年カーボンニュートラルの実現に向けて選定する「脱炭素先行地域」。認定を受ければ、再生可能エネルギーや省エネ設備の導入に対する国の継続的な支援を受けられるほか、持続可能な地域づくりを通じた経済の活性化にもつながる。OCは、茨城県笠間市の申請に共同提案者として参画し、その認定に貢献した。

「認定に向けては地域特性を生かした先進性・モデル性のある取組みを提案することが重要でした。笠間市の特性として、全国有数の栗の産地であることや、伝統文化の笠間焼が挙げられます。こうした地域資源を、脱炭素の観点からどのように活用できるかを検討しました」

取組みを検討する中で地域へのヒアリングを実施したところ、地元の栗農家が剪定枝の処分に苦慮しているという課題が明らかになった。

「初めは、剪定枝を集めてバイオマス発電に利用する案を検討しました。しかし実際には、電力利用に必要な量の確保が難しいことがわかったのです。そこで着目したのが、熱利用です。電力利用のエネルギー効率は20～30％程度であるのに対し、熱利用では約80％という高効率を実現できます。これを受け、私たちは回収した剪定枝をチップ化し、学校給食センターのボイラー燃料として活用する仕組みを提案しました。さらに、燃焼後に残る灰を笠間焼の釉薬※原料として使用し、未利用資源を無駄なく循環させるモデルを構築しました」



JAの敷地で剪定枝のチップ化作業をしている様子

剪定枝をチップ化する作業については、JAへの委託を提案し、協力を得られることになった。しかし、必要な作業時間や処理能力など、現実的な運用条件については未知数であった。

「栗の剪定枝に燃料としての活用価値があるのかを定量的に示すデータは十分に整備されていませんでした。そこで私たちは、JAの敷地を借りて約1トンの剪定枝を集め、関係事業者の協力を得ながら実証試験を実施し、チップの製造量や燃料としての実用性を検証しました。その結果、栗の剪定枝は燃料として十分に活用可能であることを示すデータを得られたことが、協力をお願いする際の安心材料につながったと思います」

今回の提案は、市とJAの双方から、「実現すれば地域に利益をもたらす事業モデルになる」と高く評価された。資源に乏しい日本において、地域の未利用資源をエネルギーとして地産地消するスキームの構築につながる提案ができた点でも、大きな意義があったと谷は振り返る。この経験を糧に、今後もエネルギーの自立化と地域活性化を両立させる、新たな事業の創出を目指したいという。

※釉薬：陶磁器の表面に施されるガラス質の膜

海外

個々の課題に寄り添い、建設企業を新たな活躍の場へつなぐ

国土交通省が実施する「中堅・中小企業建設業海外展開支援」において、管理技術者として建設企業の海外進出を支援する山本さん。国内外の関係者と連携しながら、企業の挑戦を支える取組みについてお聞きしました。



山本 裕典
海外事業部 副主幹
三重大学大学院了

2010年に入社後、関東支社環境部において環境影響評価業務等に従事したのち、オリエンタルコンサルタンツグローバルに出向。その後、関東支社環境部と海外事業部を兼務し、2024年より海外事業部専属。現在は、国土交通省等が行うインフラ輸出支援業務に携わる。

日本のインフラ設備の成熟に伴い、国内の建設市場は縮小傾向にあるものの、中堅・中小建設企業の中には、知識・ノウハウ不足等により、海外進出に躊躇している例がある。こうした状況を受け、国土交通省では、中堅・中小建設企業の海外展開を後押しする取組みを進めている。OCは、国土交通省が実施するこの取組みに継続的に携わり、海外進出を目指す建設会社に対し、公的支援制度等の紹介や現地での人脈形成、事業計画の策定などを幅広く支援している。

「支援する企業の規模は数人から数百人単位まで幅広く、事業内容も足場の組み立てや土木工事、水インフラなど多岐にわたります。そのため、企業が抱える課題は『自社の技術をどこで生かせるのか』『どの制度を使えばよいか』『人手が足りない』などさまざまです。丁寧にヒアリングをし、それぞれに最適な方法で事業を進められるようなアドバイスを心がけています」

海外展開に関心を持つ企業との最初の接点となるのが、年に1～2回、全国各地で開催するセミナーだ。

「海外展開の意義や各機関の支援制度を紹介するほか、開催地の自治体や地方銀行の担当者にも登壇していただき、活用可能なスキームをご紹介します。一方で、セミナーの集客は大きな課題の一つ。全国にあるOCの拠点網も活用しながら、参加企業を募っています」

また、10社程度の企業とともに現地の現地政府関係機関への訪問、現場視察、ビジネスマッチングなどを行う「海外訪問団」も実施しており、支援対象の企業はもちろん、日本の支援機関や現地の政府・民間企業など、さまざまな立場の関係者との円滑なコミュニケーションが欠かせない。

「建設コンサルタントとしてこれまで携わってきた領域とは異なるため、着任当初は海外特有の略語や施工関係の専門用語が飛び交う環境に戸惑いも感じていました。とにかく本を読み漁り、積極的にセミナーに参加して知識を身につける日々でした。そんな私にとって、このプロジェクトを通じて実際に海外で法人を設立した企業の存在は、大きな励みとなっています。最初はセミナーの受講側だった企業が、今では登壇者として海外進出までの経験を語ってくださっている。支援した企業が海外で活躍する姿が、達成感につながっています」

現在、現地ではインフラ整備の需要が中心だが、今後は、カーボンニュートラルやGXも重要なテーマになると山本は見据えている。先進的な知識やノウハウを取り入れながら、これまで支援した企業との連携も含めた、新たな事業機会の創出につなげていく考えだ。



セミナーにおいて中堅・中小建設企業に支援策を説明している様子

情熱座談会

技術士は、建コン技術者のパスポート

～仕事で価値を発揮するプロフェッショナルのリアル～

技術士合格とその後、「自律自走」できるコンサルタントへ至る道

建設コンサルタントの「パスポート」とも言える技術士資格について、ＯＣは若手の早期取得を支援しています。今回は制度を活用し合格を果たした４名に、合格までの軌跡や取得後の変化、そして自身のこれからについて語ってもらいました。



ファシリテーター



泉 典宏

事業管理本部 副本部長
東京都立大学卒

1988年入社。事業管理本部副本部長として、当社の技術士資格取得支援における管理者を務める。会社としての支援制度の構築や、資格取得後の若手技術者の育成にも深く関与。

参加メンバー



大藤 愛子

中部支社 河川砂防・港湾部 副主幹
金沢大学卒

河川・港湾分野の構造物設計や災害対応に従事。近年はDXや防災といった先進的なプロジェクトにて管理技術者を務め、事務所長表彰を受賞するなど幅広く活躍する。



髙力 優香

関東支社 地域活性化推進部 技術主査
芝浦工業大学卒

官民連携による都市公園の賑わい創出や地域活性化業務に広く従事。計画策定から事業者選定、開業に至る一貫したマネジメントで地域の課題解決を牽引する。



髙田 真

関東支社 PM・CM部 技術主査
埼玉大学卒

市街地の再開発から高速道路まで多岐にわたる道路設計に従事。若手登用案件で管理技術者を務め、現在は発注者支援の立場から大規模な調査等管理業務を手掛けている。



柏 祐樹

関東支社 交通政策部 技術主査
茨城大学卒

都市高速道路の安全・渋滞対策等の業務に従事。財団出向を経て国の最新政策の動向を学ぶ。現在は管理技術者として、高速道路の工事による交通影響や渋滞対策など幅広い交通課題に挑む。

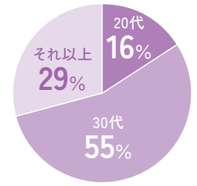
技術士の初回受験合格率



技術士の合格者38名のうち
初回受験合格者は10名

2026年3月データ

技術士取得時の平均年齢



2026年3月データ

技術士合格者年齢の全国との比較



2026年3月データ
出典：日本技術士会

「プロのパスポートを手にする道 手厚い支援で最初の関門を突破」

泉　建設コンサルタント業界において、技術士資格はまさにプロフェッショナルのパスポートとも言える重要な資格です。当社でも早期から資格取得を意識する文化や支援体制がありますが、皆さんが本格的に勉強を始めたのはいつ頃でしょうか。

髙力　私は、ＪＡＢＥＥ認定ではなかったため、内定時に技術士補の取得を勧められ、まずは、大学４年生のときに技術士補を取得しました。そのときから、この業界の技術士取得の重要性を実感し、さらに、一発合格をする先輩たちを見て刺激を受けたのがきっかけで、勉強するようになりました。

髙田　私は大学３年生の夏のインターンシップで担当していただいた先輩社員が、技術士を最年少取得されて社内で脚光を浴びているのを見たのがきっかけでした。先輩が活躍する姿を見て、ＯＣをはじめとする建設コンサルタント業界の最前線で働くには技術士が必要不可欠だと確信しました。管理技術者として自立し、会社に貢献したいという思いもありましたね。

大藤　入社したときから「取らなきゃいけない」という認識はありましたが、私は学部卒で入社して、修士卒の同期が３年目に一発で試験に合格したのを見て、「身近な同期が取れるなら自分にも不可能ではないはずだ」と現実的な目標として捉えるようになりました。

柏　皆さんと比べると、私は少しのんびりしていたかもしれません。入社当時から意識はしていましたが、目の前の業務が忙しいことを言い訳にして本腰は入れておらず、最初の受験の年に本気を出せばいいかと少し甘く考えていました。ですが自分は不合格。同期の髙田さんや髙力さんが入社５年目で、一発合格している姿を見て一気に火がつきました。また、道路新産業開発機構へ出向したタイミングで、外部の同世代が技術士を取得している環境に刺激を受け、ライバル心を持ったことも大きかったです。

泉　同期や同世代の活躍が刺激になるのは素晴らしいですね。皆さんは学部卒で最短の受験資格を得てチャレンジされていますが、技術士試験というのは、実務経験がものを言うのか、それとも机の上の勉強が合格に直結するのか、感覚としてはいかがでしょうか。

柏　実務で経験して解ける部分もちろんありますが、やっぱり試験対策のための勉強も必要不可欠だと感じました。

大藤　試験独特の論文の書き方がありますし、いかに幅広く案件を理解しているかが問われると思います。

泉　文章表現や論理構成の組み立ては合格する上で重要になってきますよね。実務をしながら実際に勉強を進めていく中で、当時の業務の忙しさや働き方、どのように工夫して勉強時間を捻出していたかも教えてもらえますか。

髙力　平日はあまり勉強できませんでした。実務に追われていて、指導してくれている上司にも「今年は厳しいかもね」と言われていたくらいです。当時は水戸市の公園に民間活力を導入する業務の主担当として動いていたので、平日に勉強時間を取るのは難しくて。一般的な知識や文章構成のところだけは土日に集中して勉強し、専門問題である都市及び地方計画の方は、自分の実務案件がうまくハマればいけるだろうという感覚で臨みましたね。

髙田　当時、担当していた業務の管理技術者が体調を崩してしまい、私がそのサポートに入って業務を巻き返さなければならない非常に忙しい時期でした。だからこそ、会社の支援制度を活用し、２週間に１日は平日の業務から離れて講習を受け、勉強に集中する機会を持てたことが本当に大きかったです。普段の勉強は完全に週末へ回すタイプで、日曜日の午後くらいになると焦り出し、夜寝るまで集中して課題をこなしていました。

大藤　私も平日忙しかったので、土日のどちらかはフルにやろうと決めて、メリハリをつけていました。当時は初めて国交省案件の主担当を任され、河川構造物の詳細設計業務に追われていて個人的にも非常に忙しい年でした。なので、講習がある１日だけは定時で上がると決めていました。講師が河川の専門ではなかったので、実務の専門的な内容は上司に聞きつつ、講師の方からは論文の構成や一般知識を教えてもらえたのが良かったです。

柏　私は出向していたタイミングで合格したのですが、移動時間などの隙間時間をなるべく使うように意識して勉強していました。週末はあまり勉強していなかったので、最後の２週間で集中的に頑張りましたね。出向から戻るタイミングで長くお休みをいただけて、詰め込みで勉強できたのが良かったです。また、出向先で国のバスタや自動運転といった上流の検討に深く携わっていた経験が非常に大きかったです。国交省の最新動向が自然と耳に入ってくる環境に２年間いたので、その実務経験が結果的に試験に直結して生きていました。

泉　会社の支援制度という点では、専門領域の諸先輩から論文指導を受けられる仕組みがあります。社内のサポート体制や添削についてはいかがでしたか。

柏　会社の強化受験者制度を活用し、部の上司だけでなく事業部や泉さんにも模擬試験の答案を見ていただきました。３回の模擬試験で答案を真っ赤になるまでチェックしていただき、修正を繰り返すことでしっかり準備して臨めたことが合格につながったと思っています。

大藤　私も事業部長や副事業部長に直接添削していただけたので、論文の精度を短期間で一気に上げることができました。独学では気づけないブラッシュアップができたのが大きかったです。

髙力　私も市販の教材を買うことはなく、会社から提供された学習用の資料や、先輩社員の優秀な過去の解答を参考にして勉強していました。文章の論理構成をゼロから作るのが難しかったので、こういう課題にはこういった対策が有効だという関係性を繰り返し学習していました。

泉　髙力さんが言うように、論文の論理構成は多くの方が最初にぶつかる壁だと思います。技術士取得はあくまでスタート。常に学び続ける姿勢が大切ですね。



キャリアパスと資格取得のリアル

- 2017年入社。公園への民間活力導入検討や賑わい創出業務に長く携わる。
- 入社5年目で取得。平日は実務に注力し、土日に集中学習。実務経験を論文に生かす。
- 都内公園への民活導入基礎調査で初管理。周辺の契約作業を学びながら自律へ。
- 入社3年目から7年間関わった水戸の公園案件が開業を迎え、大きな感動を得る。

技術士を取得すると自分に自信がつき、やりたい仕事を自分で選択できます



キャリアパスと資格取得のリアル

- 2016年入社。関東支社等で河川・港湾分野の構造物設計や災害対応などに従事。
- **入社5年目で取得。**平日講習と休日の学習でメリハリをつけ、上司の添削を活用。
- 長寿命化計画作成で初めて管理技術者を担当。原価管理を意識するようになる。
- 三重河川DX検討業務で全国横断チームを牽引。局長表彰を受賞する。

「管理技術者として直面した壁 自律自走で乗り越えた先の成長」

泉　見事に試験を突破し、技術士を取得された皆さんですが、合格後に管理技術者としてプロジェクトを引っ張る立場になってからの変化や、実際に業務を管理する人になったときの印象的なエピソードについて聞かせてください。

大藤　合格した直後は、実はそれほど大きく意識は変わりませんでした。ただ、口頭試験に向けた勉強や指導は、その後の実務にかなり役立ったと感じています。模擬面接の際に、相槌を極力減らすことや、相手の目を見てしっかり話すなど、姿勢や話し方のアドバイスをたくさんいただいて。責任者として発注者に不安を与えてはいけないと気づかされましたね。

高力　わかります、私も口頭試験の模擬面接は本当に勉強になりました。厳しい質問を重ねられて答えに窮する自分と、それに納得していない試験官のプレッシャーを感じて当時はかなり追い込まれました（笑）。でもその経験があったおかげで、本番の試験はすごく優しく感じられましたし、責任者としての立ち振る舞いも学べたと思います。

大藤　あの経験があったからこそ、私は初めて管理技術者を担当した県の河川構造物の長寿命化計画作成業務でも、発注者の前でしっかり話すことができました。

高力　私は技術士を取得してから、プロポーザルに自分が管理技術者として名前を連ね、提案書を書いてヒアリングにも臨むようになりました。全部「自分の名前と責任でやる業務」という意識にガラリと変わりましたね。初めての管理は、都内公園の基礎調査業務でした。上司が毎回の打合せに同行し、フィードバックをくださったので、そのサポートを受けながら、契約関連や原価管理のことなど周辺作業を少しずつ学んでいった感覚です。技術士を取得したことでようやくスタートラインに立ち、さらに勉強が続いていくのだと実感しました。

泉　口頭試験では、その人が本当に技術者としてのコミュニケーション能力やリーダーシップを発揮できるか、素養が評価されますからね。高田さんは、技術士を取得して何か変化はありましたか。

高田　私が初めて管理を担当したのは、入社7年目のときに担当した埼玉県の県境付近の概略設計業務です。延長およそ1キロメートルという規模でしたが、埼玉県側は都市計画道路として認定しているものの、東京都側では決定していない道路について、今後どのように事業を進めるかなど、関係者との協議や検討を行う難しい案件でした。2年目の後輩と2人で打合せに行ったのですが、自分が言葉に詰まると場に静寂が流れてしまい、これまでいかに上司に守られていたかを痛感しました。一人の担当技術者としてだけでなく、原価管理、工程管理、契約関係といったマネジメント視点を持つ必要性を強く感じた瞬間でしたね。それに加えて、技術士という肩書きが書かれた名刺を交換したときに、相手の見方が明らかに変わるのを実感しました。「期待されているな」と。柏さんはどうですか？

柏　そうですね。私が初めて管理技術者を担当したのは、神奈川県厚木市の渋滞対策検討業務でした。私と新入社員の2人体制だったのですが、新入社員の指導をしながら成果を出し、予算や工程も管理するという、すべてを自分で背負う大変さを味わいました。自分で手を動かした方が早いと思う場面もありましたが、部下の成長という観点からも入念にコミュニケーションを取り、なるべく作業を任せるように進めました。同時に、管理者として、また一人のプレーヤーとしての自分の力不足も痛感し、もっと勉強して他社に勝てる力をつけなければならないと強く思うようになりました。

泉　皆さん、それぞれ苦労しながらも素晴らしい経験を積んでいますね。では、これまでのキャリアの中で、ご自身の成長のターニングポイントとなった印象的なプロジェクトについて詳しくお聞かせいただけますか。

大藤　はい。国交省の初管理をやった令和5年度の三重河川DX検討業務が一番大変であり、最も成長できた業務です。1億円を超える大規模な業務で、九州支社にいた私が管理技術者を務めつつ、各支社から中堅クラスの優秀なメンバーを集めて全国縦断チームを結成して進めました。川が氾濫した際に浸水センサーで検知し、災害対策車が浸水域を避けて現場へたどり着けるルートをシステム上で提示するという、これまでに前例のない先進的な内容でした。初回の打合せでは事務所長も出席されていて、私がメインで説明しなければならず生きた心地がしなかったのですが、Web会議で毎週末に連携を取り、工程管理を徹底して無事完遂することができました。この結果、信頼を獲得して局長表彰をいただきました。これほど大きな案件をやり切れたことで、今後どんな案件が来ても大丈夫だという大きな自信になりました。

泉　社内でも非常に規模が大きく、先進的な内容が組み込まれた難しい業務でした。あえて管理技術者として若手である大藤さんが登用されたのは、少し背伸びをすれば届くだろうという期待があったからでしょうね。見事にその期待に応えてくれました。

高田　私はNEXCOのスマートICへのアクセス道路および舗装詳細設計業務が印象に残っています。これは35歳以下の若手チャレンジ案件として発注されたもので、管理技術者としてやってくれと上司から任されました。しかし、実は私自身、舗装詳細設計を本格的に担当するのはほぼ初めてでした。そこで、新入社員のように設計基準書を読み込み、社内の過去の類似案件を徹底的に調べて挑みました。発注者はどういう課題を解決しようとしているのかをゼロから学び直してやり切った経験は、どんな領域にも飛び込んでやり切るチャレンジ力を大きく育ててくれました。



高力　私は、入社3年目の終わりから6～7年間にわたって一貫して関わり続けた、水戸の公園賑わい創出案件が一番の思い出です。公園に飲食店などを入れて賑わいを創出する仕事で、最初は資格のない担当者として計画づくりから関わり、資格取得後は管理技術者として事業者募集や行政との調整を行いました。主担当のときはすぐ上司に聞いていましたが、管理になってからは「一回自分で考える」ようになり、自分で考え抜いてから協議に臨むスタイルへと変わりました。今年の4月に無事に飲食店が入った施設が開業を迎え、オープニングセレモニーも開催されました。式典に呼んでいただき、行政の担当者様と握手を交わした瞬間、長年の苦労が実り、地図に残る仕事ができたことに涙が出そうになるほどの感動を覚えました。

柏　今までずっとお世話になり、頼り切っていた上司が退職されたタイミングで担当した、NEXCO発注のインターチェンジ出口渋滞対策検討業務が印象に残っています。一般道との接続が絡むため、交通管理者と一般道側の道路管理者との調整が非常に難航する業務でしたが、上司がいなくなり自分が矢面に立つことになりました。毎月のように県警に通い詰め、がむしゃらに提案を続けました。相手の懸念事項を一つひとつ解消しながら粘り強く協議を重ねた結果、最終的に「柏さんがそう言うなら任せるよ」と強い信頼を寄せていただき、無事に渋滞対策の内容を決定することができました。自分が技術者として、また管理者として真に自立できた大きな節目になったと思います。

「管理と技術の両輪で次代へつなぐ技術者としての志」

泉　プレイヤーとしての技術力と、管理技術者としてのマネジメント力、両面を高めて自律自走している皆さんの姿は本当に頼もしいです。最後に、皆さんの今後の目標やキャリアプランをお聞かせいただけますか。

高田　自律自走という点では、指示されたことだけでなくプラスアルファの価値を提供できる人材になりたいです。また、DXやAIなどの先進技術と防災を組み合わせた実用的な提案にも挑戦したいですね。

高力　私は、スポーツ事業や運動施設の再編や活用など、今まで社内に知見が少なかった新しい領域にどんどん挑戦していきたいです。そのために外部との連携も深め、新しい資格取得をはじめとしたリスキリングなど、対外的な見られ方も意識しながら自己研鑽を続けていきます。

泉　皆さんの素晴らしい志と熱意を聞くことができ、私自身とても嬉しく、頼もしく思いました。オリエンタルコンサルタンツには、先輩が後輩を熱心に指導し、若手がそれに応えて大きく成長していくという学びと支援の文化があります。本日皆さんが語ってくれた情熱と志が、次の世代の後輩たちへ受け継がれ、会社全体がより発展していくことを期待しています。本日はありがとうございました。

技術士は挑戦のフィールドを大きく広げ、今後の成長の鍵となります



キャリアパスと資格取得のリアル

- 2017年入社。スマートICや道路詳細設計などの実務経験を幅広く積む。
- **入社5年目で取得。**支援制度の平日講習を活用し、休日にまとめて集中学習を行った。
- 埼玉県境の概略設計で初管理。後輩とともに臨み、マネジメントの重要性を痛感。
- スマートICの案件で、経験の浅い舗装詳細設計に挑みやり抜く力を培う。

受け身にならず能動的に動き、知識と課題設定力を磨いていきましょう



キャリアパスと資格取得のリアル

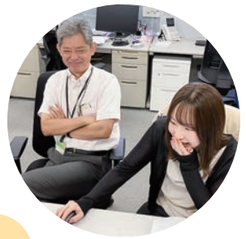
- 2017年入社。関東支社交通政策部にて、都市高速道路の安全・渋滞対策等に従事。
- **入社7年目で取得。**出向経験や直前の集中学習、模擬試験で実力を大幅に向上。
- 厚木市の渋滞対策業務で初管理。新入社員を指導しながら予算・工程管理を学ぶ。
- IC出口渋滞対策で警察協議を主導。自ら提案を続け、発注者から信頼を獲得。






























はたらく社員の“笑顔”

はたらく社員の“笑顔”の第9弾をお届けします。
全国の仕事の様子をセレクト。それでは、一挙公開!!

成長のキセキ

技術士資格取得や各種制度の利用など、社員の「成長」や「育成」に関するエピソードをご紹介します。

遊びと防災を両立 公共空間の新たな価値を追求

災害への備えを取り入れた 次世代の公園づくり

OCが指定管理業務を担う、和歌山県の海南市民防災公園（海南ハレアメ）。その公募に際し、前職で指定管理事業に従事していた私は、アドバイザーとしてOCと協働していましたが、のちに公園の運営業務に携わるためにOCへ入社しました。

海南ハレアメは、かつて「わんぱく公園」の名称で子ども向けの遊び場として親しまれていましたが、2026年4月からは災害時の復興拠点としても機能する防災公園へと生まれ変わりました。

遊びと防災を両立させた公園は珍しく、今回の指定管理業務はOCにとっても初の挑戦となります。私自身も、施設の立ち上げを提案から担った経験はなく、行政と協議を重ねながら、防災の視点を取り入れた公園づくりを検討しました。

行政から求められたのは、「多世代が楽しめる上、防災にも生かせる工夫」です。そこで、自主事業としてマウンテンバイクフィールドを設置。平時はアクティビティを楽しめる一方、災害時は車両の進入が困難な道を通行するモビリティとしても活用でき、防災公園の役割を具現化した取組みとなっています。

行政と連携しながら、平時と災害時の双方に価値を発揮する地域拠点づくりに携わった経験を、新たな指定管理事業やPFI事業の展開にも生かしていきたいです。

坂下 直生

関西支社 総合計画部
金沢大学卒

指定管理事業を実施する公益財団法人への勤務を経て、2025年にOCへ入社。「海南ハレアメ」の指定管理事業に従事し、同公園の副園長および利用促進業務責任者を兼任する。



新入社員研修の場を最大限に活用、講義内容を超えた成果を得る

明確な目的意識を持ち、 実務で生きる力を磨く

新入社員研修は1ヶ月にわたり、部署ごとに実施され、座学や5～6人単位でのグループワークなどを通じて、各部の業務内容や案件への理解を深めました。私が所属する事業企画部の業務には、社内外を問わず円滑なコミュニケーションが欠かせません。そこで私は「伝える力」を高めることを目指し、グループワークでは積極的にファシリテーターを担当。一人ひとりの考えを引き出しながら、全員が共通認識を持って議論を進められるよう取り組みました。

さらに、研修期間中に「同期全員と話すこと」を目標に据え、研修の合間に自ら話しかけに行ったり、全員参加の懇親会を企画したりするなかで、67名全員と接点を持ち、交流を深めることができました。もともと人と話すのが好きな私にとって大変充実した経験となっただけでなく、これから業務で連携する際にも気軽に相談し合える関係性が築けました。

研修をとおし、「伝える力」に加えて「目的意識を持つ力」や「周囲を巻き込む力」が身についたと感じています。同期と協力し、質の高いアウトプットを追求した経験は、建設コンサルタントとして業務に臨む上で欠かせない、重要な土台になると思います。研修での学びを生かし、1日でも早く会社に貢献できるよう努力していきます。

中村 康佑

関東支社 事業企画部
金沢大学卒

2025年10月に入社。事業企画部で、新規案件の創出や営業戦略の立案などに従事する。



Copilotを駆使したシステム構築で劇的な業務改善を実現

生成AIを相棒に、 経験ゼロで挑んだDX化

契約業務や外勤サポートでは、案件の入札結果をPDFからExcelへ転記する作業が、年間140件ほど発生します。しかし、短期間で正確な入力が求められるため、作業者の負担となっていました。私はこの作業を効率化するため、Power Automate Desktop（PAD）を用いた自動転記フローを構築しようとしましたが、PADの作成経験やプログラミングの知識はゼロ。そこで、生成AIツール「Copilot」に質問しながら進めることにしました。

そして約1ヶ月後、ついに自動転記フローが完成しました。1件あたり2～3分を要していた作業が、自動化後は40件の処理を1分以内で完了。合計約6時間の作業時間を削減し、作業にあたっていたアルバイト従業員の負担軽減にもつながりました。

この経験をとおし、PADフローの仕組みや自動化の考え方への理解が深まったことはもちろん、ほかの業務についても「自動化できるかもしれない」という視点で見直せるようになり、自身の成長にもつながったと感じています。

篠原 陽子

関東支社 事務企画部
千葉県立白井高等学校卒

1996年に入社。現在は、事務企画部にて契約業務全般を担うとともに、外勤業務のサポートに従事する。



組織課題への取組みが評価され Motivation Team Award2026に入選

一人ひとりが行動を見直し チーム力の向上につなげる

関西支社の構造部構造技術チームでは当初、幹部職と一般職が長期間にわたり同じペアで業務にあたっていました。しかし、固定された人間関係によりチーム内でのコミュニケーションが十分に図れず、上司・部下の双方がお互いへの不満を抱えてしまうという課題に直面していました。

そこで、チーム内を約10名ずつの2グループへ再編し、2つの行動指針を掲げました。1つ目は「情報共有の場の有効活用」。2週間に1回程度、グループごとに業務の進捗を共有する場を設け、メンバー同士が互いの担当業務や課題を把握できる機会をつくりました。2つ目は「メンバー間での積極的な声掛けや質問」です。上司は部下を進んでサポートするよう意識し、部下は上司へ自ら相談するよう心がける双方向のアプローチにより、以前よりもお互いの心理的な距離が縮まりました。

その結果、2024年には49.9ポイントだったエンゲージメントスコアが、1年後には58.7ポイントまでアップしたのです。全員が一丸となって組織課題に向き合ったプロセスは外部からも高く評価され、「Motivation Team Award2026」への入選を果たしました。

今後も、一人ひとりが業務にやりがいを感じられるチームを、メンバー全員でつくっていきます。

前列右）西川 啓二

関西支社 構造部 技師長
神戸大学大学院了

1999年に入社。現在は管理技術者として橋梁設計に従事する。また、構造技術チームのリーダーとして、チームの運営やメンバーの育成、チームの受注・生産管理などを行う。



新たな取組みから、組織づくりについてまで語っていただきました。

Column

OC社員、会社の出来事を語る！

社内行事や研究、注目の取組みや業務など、一つのテーマに絞って出来事を深掘り。
一人のOC社員が体験し、感じたことを、その人の言葉や想いそのままに掲載します。

テーマ：シンガポール現地レポート

快適とも厳しいとも言える、シンガポールの交通事情

シンガポールは東京23区ほどの面積に約600万人が暮らす都市国家ですが、道路交通は非常に円滑に機能しています。特にバスは路線数や運行本数が非常に多く、市内のほぼどこへでも移動できるうえ、英国式二階建て車両も多く快適です（しかし運転はとても荒い）。また、運賃は移動距離に応じて計算され、バスや鉄道をいくら乗り継いでも追加負担が小さいため、遠距離でも低価格で利用できます。一方で、自家用車には容赦ない高額な車両所有権制度（1台のナンバープレートだけで約1500万円程度、加えて車両購入費）や都心部への道路課金制度が導入されており、利用が厳しく抑制されています（お金持ちしか乗れません）。その結果、深刻な渋滞が少なく、バスやタクシーの運行効率向上にもつながっています。


こどもは見ても乗っても楽しい2階建てバス

文・社員／後藤 りえ
海外事業部 技術主査

テーマ：公式SNS（Instagram、X）について

SNSによる当社の魅力度向上 ～建設コンサルタントを超えろ！～

当社では求職者の方をはじめとする多くの皆様へ我が社の魅力を伝えるため、2024年10月より公式SNS「インスタグラム」「X」の運用を開始しました。リクルート情報や社員紹介、リール動画、業務の実績などを週2回投稿しており、フォロワーも増え、少しずつ認知されてきた今日この頃だと感じています。企業の魅力は製品やサービスだけでなく、働く人や企業文化にもあります。SNSは当社の日常や価値観を発信し、多くの方に知っていただく機会だと思っています。当社の魅力を最もよく知っているのは日々働く私たち自身であり、SNSはその魅力を社外へ届けるための大切なツールです。今後も引き続き様々な企画を投稿して参りますので、皆さん是非ご覧ください！



文・社員／丸山 由佳
本社 統括本部

テーマ：クラブ活動で得た気づき（関東支社フットサル部）

仲間とつかんだ優勝、チーム力で挑む次の舞台参加者募集中!!

フットサル部の活動を通じて特に印象に残っているのは、全国設計事務所健康保険組合主催のサッカー大会でDivision2に出場し、23チーム中1位で優勝を果たし、Division1へ昇格できたことです。試合では部署や年次を越えて声を掛け合い、チームとして一つの目標に向かう楽しさを改めて感じました。Division1では4位という結果となり、上位チームと戦うには個の力だけでなく、連携や役割分担といったチーム力が必要であることを実感しました。また、新入社員や他部署の方と交流する機会も増え、仕事だけでは見えにくい一面を知るきっかけにもなりました。フットサル部は、経験の有無にかかわらず参加しやすく、仲間とのつながりを広げられる場でもあります。今後も無理なく楽しみながら活動の輪を広げ、チームとして新たな挑戦を重ねていきます。



Division2優勝!!


フットサル部活動@渋谷

文・社員／渡邊 拓也
関東支社 河川砂防・港湾部 技術主査

テーマ：田中賞受賞しました。やったぜ！

女性も男性も、育児も介護も、多様な働き方を支える活動を推進中！

Smile-3S活動は当初、女性の平均勤続年数が男性より短いことを課題とし、ライフイベントに対応しつつ定着・活躍を図るための施策検討を目的に始まりました。成果として、仕事と家庭との両立を実現する各種制度が整いました。一方で、共働きの増加、高齢化などの社会環境の変化から、男性の育休や家庭での役割分担、介護との両立などの新たな課題が生まれ、活動が広がっています。男性委員も増えており、68期のフェアでは〝男性育休〟をテーマに、制度利用した社員とその上司から、男性ならではの運用の悩み・工夫等を聞きました。69期は〝介護〟をテーマに開催しました。このように制度利用が拡大して、利用する側、サポートする側の相互理解、マネジメントがより重要になっています。少しでも働きやすい社風醸成にむけて引き続き活動を推進しますので、ご協力ください！


社長も参加する委員会の様子（各支社から集まります）


休憩時間も楽しいひととき

文・社員／佐藤真理子
関東支社 地域活性化推進部 次長

テーマ：広がるSmile-3S活動

私は橋梁設計に携わり約三十年、家族に誇れる構造物をつくりたいという思いで歩んできました。虎ノ門Tデッキは、デザインコンペから基本設計、詳細設計、工事監理、点検、維持管理計画まで十年にわたり関わり続けた思い入れのある作品です。オリコン社内はもちろん、森ビル、ヒルズ&バートナーズジャパン、鹿島建設をはじめとする多くの仲間と議論と試行錯誤を重ね、特殊構造ゆえの課題に対しても国総研への相談などで一つずつ課題解決してきました。一般的な道路橋示方書に準拠した橋とは異なる構造とデザインの両立のため多くの挑戦を乗り越え、実現に向かう協働する力が評価されて土木学会田中賞という最高に栄誉ある賞を受賞できたものと思います。夢は仲間とともにあきらめずに取り組めば叶えられるものだと実感しました。

標準規格を越えた虎ノ門Tデッキの実現に向けた挑戦!!


虎ノ門Tデッキ全景（虎ノ門横断歩道橋）


虎ノ門Tデッキ桁下折板デザイン

文・社員／高城 勇一
九州支社 構造部 副部長

テーマ：河川清掃（CSR）活動の運営を通じて感じたこと

肌寒い11月に実施した河川清掃活動と運営記録

今期の河川清掃活動では、事前準備から当日の運営補助まで携わりました。参加者の募集や関係各所との調整を進める中で、活動を円滑に実施するためには、事前の調整や確認が欠かせないことを実感しました。当日は肌寒い気候の中での実施となり、落ち葉も多く、想定よりごみ袋の使用量が増える場面もありましたが、参加者の皆さんに清掃だけでなく運営へもご協力いただけたおかげで、無事に活動を終えることができました。清掃後は河川周辺が綺麗になった様子を見て、小さな達成感を感じました。また、社員のご家族にも参加いただく機会となり、清掃活動後には、参加してくれたお子さまたちへスヌーピーのクリスマスギフトバッグをプレゼントし、喜んでいただけた姿を見て、和やかな気持ちで活動を終えることができました！


こんなに綺麗になりました!


この写真は回収ごみのほんの一部です!

文・社員／季広 知夏
九州支社 事業企画部

第17号 2026年10月 発行 株式会社オリエンタルコンサルタンツ 本社 〒151-0071 東京都渋谷区本町3丁目12番1号 住友不動産西新宿ビル6号館 TEL.03-6311-7551(代) FAX.03-6311-8011

News&Topics

研修など 25/10/03 (Fri)
2026年度新卒採用内定式及び内定者研修を開催

受賞 25/10/15 (Wed)
2025年度グッドデザイン賞を2件受賞「旭川市平和通買物公園エリアの地域共創まちづくり（まちにち計画）」「御堂筋ほこみちユニットベンチプロジェクト」

研修など 25/10/27 (Mon)
管理職候補の中堅社員を対象とした研修を開催

研修など 25/11/4 (Tue)
管理職の社員を対象とした研修を開催

受賞 25/11/17 (Mon)
令和6年度全建賞を受賞「都市計画道路 鮎川停車場線 整備事業」

受賞 25/11/17 (Mon)
令和6年度全建賞を受賞「都心部における基盤整備のあり方～国道246号渋谷駅周辺整備～」

受賞 25/11/20 (Thu)
第11回女性技術者育成功労賞 組織優秀賞を受賞

受賞 25/11/28 (Fri)
土木学会デザイン賞2025最優秀賞・優秀賞・奨励賞3作品受賞「最優秀賞 馬場川通りアーバンデザインプロジェクト」「優秀賞 多摩川スカイブリッジ」「奨励賞 アルミニウム合金製防護柵パノレール」

研修など 25/12/01 (Mon)
健康管理に関する研修の開催～セルフケア及びラインケアについて～

受賞 25/12/12 (Fri)
株式会社瀬戸酒造店が2025年世界酒蔵ランキングで2年連続、3回目のTOP10に認定。酒造再開から8年目の快挙

社内施策 26/01/05 (Mon)
第69期 12月創立記念表彰

社内施策 26/02/27 (Fri)
当社内の3組織が、「Motivation Team Award 2026」入選！ ～エンゲージメントを高める人材育成・組織づくりの推進～

受賞 26/03/17 (Tue)
宝島社「田舎暮らしの本」"道の駅を制覇したプロたちが選ぶ2026年版道の駅大賞"にて、2年連続で、全国総合部門第1位を受賞

研修など 26/03/23 (Mon)
健康経営優良法人2026に認定

研修など 26/04/01 (Wed)
2026年度入社式を開催

社内施策 26/04/02 (Thu)
第69期4月表彰

研修など 26/04/13 (Mon)
2026年度新入社員研修を開催

受賞 26/04/22 (Wed)
ジャパン・レジリエンス・アワード（強靱化大賞）2026にて優秀賞を受賞「地域防災力の強化に向けた3D都市モデルを活用した水害リスクに係る防災教育による流域治水の自分事化の促進」

受賞 26/05/22 (Fri)
令和7年度土木学会田中賞（作品部門）受賞！「TORANOMONHILLS 横断歩道橋」

受賞 26/05/25 (Mon)
あつぎこどもの森公園が自然共生サイトに認定

研修など 26/07/03 (Fri)
2年目研修を開催

研修など 26/07/31 (Fri)
3年目研修を開催

研修など 26/08/05 (Wed)
Smile - 3Sフェア〈テーマ：介護について〉を開催

受賞 25/11/20 (Thu)

第11回女性技術者育成功労賞 組織優秀賞を受賞

流域管理・保全事業部が、「第11回女性技術者育成功労賞」において「組織優秀賞」を受賞。女性技術者の活躍推進に顕著な成果を上げた個人や組織を表彰する同賞で、当事業部における業界水準を上回る女性社員比率や、女性管理職の積極的な登用などが評価されました。表彰式には、流域管理・保全事業部分野統括（河川分野）の佐藤睦美さんが出席しました。


表彰状を手にした佐藤睦美さん

受賞 25/12/12 (Fri)

株式会社瀬戸酒造店が2025年世界酒蔵ランキングで2年連続、3回目のTOP10に認定。酒造再開から8年目の快挙

子会社の株式会社瀬戸酒造店が「世界酒蔵ランキング2025」で9位に認定され、2022年の9位、2024年の8位に続き、2年連続3回目のTOP10入りとなりました。本ランキングでは、その年に開かれた主要な日本酒コンテストの受賞実績をもとに酒蔵を順位づけします。今回対象となった酒蔵は698蔵、商品はのべ3,415点でした。


TOP10の酒蔵と瀬戸酒造店代表の森代表（中央）

受賞 25/11/28 (Fri)

土木学会デザイン賞2025最優秀賞・優秀賞・奨励賞3作品受賞

当社がデザインと設計に関わった3作品が「土木学会デザイン賞2025」において表題の賞を獲得。同賞は、周辺環境に調和する景観の創出に貢献した作品や関係者を表彰するもので、今回で4年連続の受賞となりました。


最優秀賞 馬場川通りアーバンデザインプロジェクト


優秀賞 多摩川スカイブリッジ


奨励賞 アルミニウム合金製防護柵パノレール

研修など 26/04/01 (Wed)

2026年度入社式を開催

67名の新入社員を迎え、入社式を実施しました。「技術力とマネジメント力を駆使し、プロフェッショナルな"情熱人材"を目指してほしい」という、野崎社長からの激励の言葉を一人ひとりが受け止めました。


真剣な表情で社長の話に耳を傾ける新入社員

公式SNSでも情報発信中！
Instagram X

本誌掲載のプロジェクト及び社員へのお問い合わせは、下記までご連絡ください。

Tel 03-6311-7551(代) Fax 03-6311-8011 Mail jyoyari@oriconsul.com

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
ORICONSUL

※組織名、所属、役職は2026年9月時点のものです。